

# 小学校社会科における地域教材を生かした 防災教育の授業構成と実践分析

## — 第5学年単元「学校・学区の歴史から学ぶ防災学習」の場合 —

Lesson composition and practical analysis of disaster prevention education  
making full use of regional teaching materials in elementary school social studies  
In the case of the fifth grade unit “Disaster prevention learning from the history  
of schools and school districts”

白井 克尚<sup>1)</sup>、松本 卓也<sup>2)</sup>

Katsuhisa Shirai<sup>1)</sup> and Takuya Matsumoto<sup>2)</sup>

1) 愛知東邦大学教育学部、2) 愛知教育大学附属名古屋小学校

本稿では、小学校社会科における地域教材を生かした防災教育の授業開発と実践分析を行い、「公民としての資質・能力」育成の視点や、「カリキュラム・マネジメント」の視点から、その実践的意義について考察した。「公民としての資質・能力」の視点からは、①社会的事象等についての知識・技能 ②社会的事象等についての思考・判断・表現 ③社会的事象等に主体的に関わろうとする態度の育成を可能にしていたことを明らかにした。「カリキュラム・マネジメント」の視点からは、①教科横断的な視点 ②PDCAサイクル ③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせることにおいて意義があったことを明らかにした。

### 1. はじめに

本研究の目的は、小学校社会科における地域教材を生かした防災教育の授業開発と実践分析を行い、「公民としての資質・能力」育成の視点や、「カリキュラム・マネジメント」の視点から考察を行い、その授業実践の意義を明らかにすることである。

現在、東日本大震災、熊本地震など大規模な自然災害が多発する中、学校教育を通じた児童・生徒の防災意識の向上が求められている。そのような状況下において児童・生徒の防災意識の向上をめざした試みが、全国各地において実践されており、各地域の実態に応じた実践も蓄積されつつある。

日本社会科教育学会は、社会科教育において東日本大震災にどう向き合うかという問題意識のもと、市民性の育成や社会認識形成と関連付けた防災教育の取り組みを推進している。学会における震災対応特別委員会では、災害および防災教育をどのようにして社会科の授業づくりに活かせるか、また今後の被災地の復興に社会科はいかに関わるべきかについて検討・研究を進めている。さらに、2015年度学会大会（2015年11月7日 於：宮城教育大学）では、「社会科における復興教育の可能性をさぐる—新たな地域創生と社会参画—」というシンポジウムを開催し、「被災地復興に社会科はどう向き合うか？」という課題研究も行われた。さらに、同学会誌第127号では、「災害に備える社会科」特集論文を掲載し、続く第128号では、復興教育や防災学習と社会科に関連する論考を掲載し、社会科における防災学習の実践化への示唆を与えるものとなっている。また、同学会が編集した『社会科教育と災害・防災学習—東日本大震災に社会科はどう向き合うか』（明石書店、2018年8月31日刊行）では、多くの授業実践を通して災害に備えるための授業のヒントとなる視点を提供すると同時に、社会科が果たすべき災害・防災教育の役割について考察している。

これらの研究成果を踏まえ、被災地以外の小学校社会科においても、地域の教材を生かした防災教育の教材開発・授業づくり・授業実践に、継続して取り組んでいく必要があると考える。なぜならば、防災学習において求められる社会認識は、各地域の実態に応じたものとなり<sup>(1)</sup>、そのために小学校社会科として地域や学級の子どもたちの実態に合わせていかなる社会認識を育むべきか、どのような単元構成や授業構成を行うことが適切であるかといった授業開発や実践の意義に関する考察を、それぞれの地域において深め、実践の事実に基づく検証を進めていく必要があると考えるためである。

したがって、本稿では、次の二つの分析視角からの検証を行っていききたい。第一に、今次の学習指導要領の改定で示された「公民としての資質・能力」<sup>(2)</sup>の視点である。現在、コンピテンシー・ベースでの学力観の転換が行われつつある。そのために、各地域における児童の防災学習を通じた資質・能力の向上に、小学校社会科はいかに関わっていくべきかといった課題に対して、学習成果の検証を継続して行っていく必要があるだろう。第二に、「カリキュラム・マネジメント」<sup>(3)</sup>の視点である。今次の学習指導要領の改定で提唱された「カリキュラム・マネジメント」は、未だ十分理解・定着しているとは言い難い。社会科教育学研究の分野での研究<sup>(4)</sup>は取りまとめつつあるものの、各地域の実態に応じた小学校社会科の実践的検証を通じて、その方略を充実化していくことが更に求められよう。

以上のような問題意識に基づき、本稿では、名古屋市立A小学校において取り組んだ第5学年単元「学校・学区の歴史から学ぶ防災学習」の社会科実践<sup>(5)</sup>を事例として取り上げ、その授業構成と実践分析に関する考察を深めていきたい。

## 2. 第5学年単元「学校・学区の歴史から学ぶ防災学習」の概要

### (1) 実践校の地域的特色

実践校：2018年度 名古屋市立A小学校 5年生37名

実践校は、名古屋市の湾岸部に位置し、伊勢湾とつながるS川が学区の境に流れている。南海トラフ地震が起きた場合、学区内は少なくとも1m以上の津波が来ることが想定されている。古くから米づくりが盛んな土壌であるため、液状化の可能性も高い。また、地震だけでなく、伊勢湾台風の影響を受けた地域でもあり、地震はもちろん、風水害が発生する可能性も高い地域である。

伊勢湾台風に関する記録は、学校ごとに作成された資料が名古屋市の図書館の伊勢湾台風コーナーに残っており、学校の被害状況、写真、記録、被害後の当時の児童による作文なども残っている。小学校社会科の学習において、写真1のような学区に残る歴史資料を地域教材として活用することを考えた。



写真1 A小学校区の伊勢湾台風の被害に関する記録資料

左：南図書館勢湾台風資料室所蔵「伊勢湾台風災害誌名古屋市小中学校（港区）」

右：松沢正三（記・撮影）『南陽町の被害と防疫活動 伊勢湾台風』1959

### (2) 単元のねらい

単元のテーマ：学校・学区の歴史から学ぶ防災学習

単元のねらい：学校・学区の歴史から過去の災害（伊勢湾台風）について学び、これからの防災について考えることができる子どもを育てる。

この単元のテーマおよびねらいは、小学校社会科において、過去の災害（伊勢湾台風）によって起こった具体的な被害の実態について学ぶ中で、学校・学区の歴史という歴史認識・地理認識を踏まえ、地域社会に生きる市民として必要な防災意識をもって行動できるようになってほしいという願いから設定した。

### （３）単元構成

#### ① 事前アンケートの実施

##### ① 伊勢湾台風について知ろう

伊勢湾台風の学校・学区の被害状況を、現在の学区と比較して確認し、自分の住む地域にも大きな自然災害の経験があったことを知り、防災に関する興味関心を高める。

##### ② 伊勢湾台風の学校・学区における被害状況について調べよう

伊勢湾台風関連の学校・学区の地図・資料と、校内に残る資料から、伊勢湾台風について調べ学習を行う。

##### ③ 現代の自然災害の被害について知ろう

「伊勢湾台風に匹敵する台風」というニュースが流れても、伊勢湾台風と同じ規模の被害にまでつながっていないという現在の学区の風水害の被害状況を知り、その理由を予想し、話し合う。

##### ④ 防災についての自分の考えをまとめよう

学校・学区の歴史から、過去の災害（伊勢湾台風）について何を学び、防災についてどのように考えたのかをまとめる。

この単元は、A小学校の5年生を対象として、2018年9月に4時間完了で計画・実施したものである。前時まで、事前アンケートを実施し、児童が地域における伊勢湾台風の被害についてどれだけ知っているか、現在防災意識をどれくらいもっているかについて、調査を行った。第1時には、伊勢湾台風の概要と、学校・学区の被害状況を、現在の学区と比較して確認させ、自分の住む地域にも大きな災害の経験があることを知らせ、防災に関する興味関心を高めた。第2時に、伊勢湾台風当時の学校・学区の地図・資料と、現在の学校・学区の資料と校内敷地に残る資料から、伊勢湾台風について調べ学習を行わせた。第3時に、現在の風水害の被害を知り、「伊勢湾台風に匹敵する台風」というニュースが流れても、現在では伊勢湾台風と同じ規模の被害にまでつながっていない理由を予想し、話し合わせた。第4時に、学校・学区の歴史から過去の災害（伊勢湾台風）から何を学び、災害対策について自分の考えをまとめさせた。

### （４）単元の流れ

#### ① 事前アンケートの実施

2018年9月に、事前アンケートを実施した（対象児童小学校5年生 37人）。アンケートの結

果は、以下の通りである。

1	「伊勢湾台風」という言葉を、これまでに聞いたことがありますか。	はい いいえ	35人 2人
2	家族の中に、「伊勢湾台風」の被害を受けた経験のある人はいいますか。	はい いいえ わからない	6人 5人 26人
3	「伊勢湾台風」が起きたときの、A小学校の学区の被害について、話を聞いたことがありますか。	はい いいえ	3人 34人
4	台風や津波が発生した時に、A学区のどのあたりが、どれくらい浸水するか、予想の地図やグラフを見たことはありますか。	はい いいえ	7人 30人
5	「ハザードマップ」という言葉を聞いたり、「ハザードマップ」を見たり、したことはありますか。	はい いいえ わからない	18人 8人 11人
6	災害が起きたとき、どのように避難をするか、どのように行動するか、家族で話し合ったことはありますか。	はい いいえ	21人 16人
7	6で「はい」と答えた人は、どのような内容だったかを書いてください。(主な内容のみ記載)		
	大きな災害の時はA小学校に避難しようと話し合いました 地震が起きたらどの場所で、どこで待ち合わせということ 避難するときに何を持っていくか いったん学校に行き、安全になったら迎えに来てくれるという話 連絡の方法		
8	6で「いいえ」と答えた人は、どのようなことを家族で話し合うことが必要だと思うかを書いてください。(主な内容のみ記載)		
	どこに避難するか。食べ物は何を備えればよいか 家族が集まる場所 持ち物		

以上のアンケート結果より、「伊勢湾台風」という言葉を、これまでに聞いたことのある児童は多いものの、家族の中に、「伊勢湾台風」の被害を受けた経験のある人がいるかはわからない、A小学校の学区の被害について、話を聞いたことがある子どもは少ないという実態が明らかになった。また、防災意識として、A学区のどのあたりが、どれくらい浸水するか、予想の地図やグラフを見たことはないと答えた子どもが多く、「ハザードマップ」という言葉を聞いたり、「ハザードマップ」を見たりしたことは多少あるものの、災害が起きたとき、どのように避難をするか、どのように行動するか、家族で話し合ったことは十分でないという実態が明らかになった。そのような子どもの実態をふまえ、学校・学区の歴史から伊勢湾台風の具体的な被害の状況について理解させ、現代における地域社会の状況と比較して考えさせることを通じて、防災意識を高めることをねらいとした。

① 伊勢湾台風について知ろう

第1時には、伊勢湾台風の学校・学区の被害状況を知らせ、自分の住む地域にも大きな災害の経験があったことを理解させ、防災に関する興味関心を高めることをねらいとして取り組んだ。授業の流れと板書は、以下の通りである。また、調べ学習で用いた伊勢湾台風に関する記念碑・看板の一部を写真2で示す。

<第1時 授業の流れ>

学習活動	指導上の留意点
<p>① 昔の学校の位置を調べる。</p> <p>② 地形の変化がないことを調べる。</p> <p>③ 伊勢湾台風の被害の状況を調べる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地形に大きな変化はないので、また大きい台風が来たら同じことが起こる可能性を捉えさせる。</li> <li>・地形が変わっていない一方で、大きな被害が最近では起きていないことから、何か対策しているのではないかと予想をさせる。</li> </ul>



写真2 A小学校内にある伊勢湾台風に関する記念碑・看板



写真3 第1時における板書

本授業実践に際し、抽出児としてA児を挙げ、学習の成果を検証することとした。教師による抽出児の捉えは、以下の通りである。A児は、自ら発言はしないものの、授業に対する反応やつぶやきがよくあり、意欲が高い児童である。しかし、物事を表面的に捉えるところもあると考えている。このA児の変容を追う中で、単元のねらいに迫ろうと考えた。

第1時の授業後におけるA児の感想は、以下の通りである。

昔と今、あまり変わってないように見えて、どこが変わり、どこがいっしょなのか、対策をしているのか、疑問に思いました。(A児)

A児は、A小学校区の地形はあまり変わっておらず、そのため、防災対策をしているのかについてはよくわからないという感想をもった。

このA児の感想のように、第1時の学習を通じて、児童らは、学区・学校における土地利用の違いについての気づきを持ったものの、伊勢湾台風の被害には目が向いていない様子であった。そこで、まず児童に、学校・学区の歴史資料を活用した調べ学習を行わせることで、伊勢湾台風の被害について具体的に考えさせたいと願った。

## ② 伊勢湾台風の学校・学区における被害状況について調べよう

第2時には、伊勢湾台風関連の学校・学区の地図・資料と、校内に残る資料から、伊勢湾台風の被害状況について調べ学習を行わせた。授業の流れは、以下の通りである。また、調べ学習で用いた図書資料の一部を写真4で示す。

### <第2時 授業の流れ>

学習活動	指導上の留意点
<p>① 学校・学区の歴史資料から調べる。                      &lt;使用する学校・学区の歴史資料&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の記録被害の資料</li> <li>・現在も残る地名が明記された、被害状況の写真資料</li> <li>・被害児童の当時の作文</li> </ul> <p>② 現在の資料から調べる。                      &lt;使用する現在の資料&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校敷地内の伊勢湾台風の概要と最高浸水水位の表示棒</li> <li>・現在の学区地図</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・台風の恐ろしさを捉えさせる。</li> <li>・被害の記録が現在も残っている意味を考えるように促す。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・伊勢湾台風の記録が、現在も学校に残されているほど、災害の歴史が重要であることに気付かせる。</li> <li>・防災に対する意識と、自分事としての意識を高めさせる。</li> </ul>

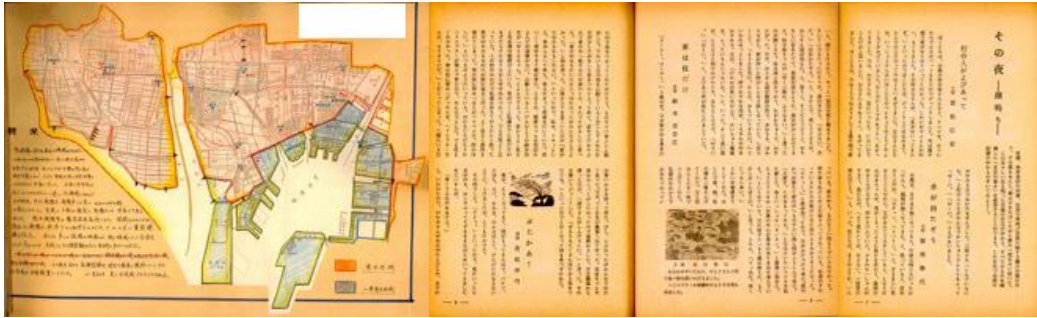


写真4 伊勢湾台風の学校・学区における被害状況について調べ学習で用いた図書資料  
左：南図書館勢湾台風資料室所蔵「伊勢湾台風災害誌 名古屋市小中学校(港区)」  
右：『伊勢湾台風 一周年を迎えて』名古屋市立南陽小学校, 1961

第2時の授業後におけるA児の感想は、以下の通りである。

すごく大きな被害があることがわかりました。なくなっている人まで出ていると知り、大変だった、かわいそうだったと思いました。そして、A小学校は、すごい被害を受けていることを知りました。もしもきたらと、すごく心配になりました。(A児)

A児は、当初、台風の災害の恐ろしさについての認識がなかったが、伊勢湾台風の被害について調べる活動を通じて、台風の恐ろしさを認識することができた様子であった。

このA児の感想のように、第2時では、調べ学習を通じて、学区・学校における

伊勢湾台風の被害の大きさに目を向けていったことがわかる。しかし、「かわいそう」というように他人事としてとらえ、現在における自然災害の問題には目が向いていない児童の姿も浮かび上がった。そこで、児童に、現在の自然災害の被害について予測させ、被害の大きさについて話し合う活動を通じて、防災についての意識を高めることを考えた。

### ③ 現在の自然災害の被害について話し合おう

第3時には、2018年9月に発生した台風の体験として、「伊勢湾台風に匹敵」という言葉がニュースで出るほどの大型台風が上陸・通過しても、伊勢湾台風と同じ規模の被害にまでつながっていないことを知らせ、その理由を予想し、話し合わせた。授業の流れと板書は、以下の通りである。



### <第3時 授業の流れ>

学習活動	指導上の留意点
① 2018年9月に発生した台風24号の体験を取り上げる。「伊勢湾台風に匹敵」とのニュースで言われていた台風が上陸し、学区も暴風圏内に入り、避難勧告も出された経験から感じた感想や、家での行動について振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>不安や心配に対する対策に目を向けさせる。</li> <li>避難勧告発令時刻と満潮時刻とのずれの違いの理由を考えさせる。</li> <li>堤防の発達や町の発展について捉えさせる。</li> <li>避難勧告の情報の重要性と早く伝える仕組みを理解させる。</li> </ul>
② 「伊勢湾台風に匹敵」と言われても、大きな被害が出なかった理由を考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>伊勢湾台風の経験が生かされていることを捉えさせる。</li> </ul>

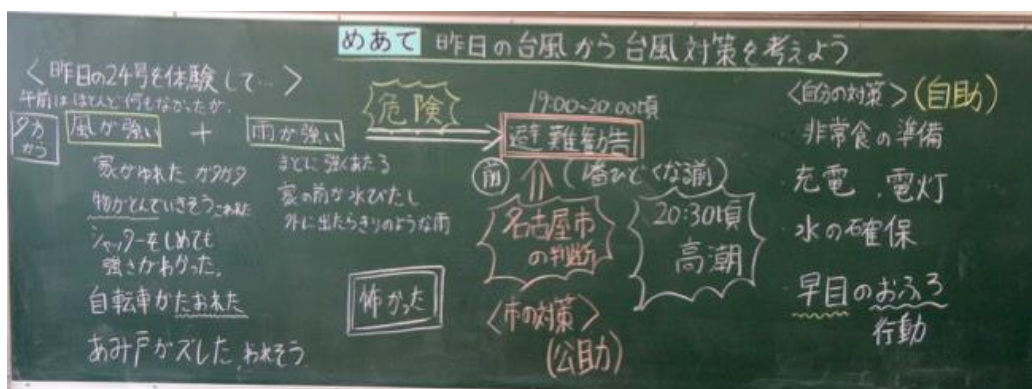


写真5 第3時における板書

第3時の授業後におけるA児の感想は、以下の通りである。

避難かんこくの時間が、じっさいの危険な時間と合っていて、大きな台風を日本が経験しているの、避難かんこくが出せた。(A児)

A児は、過去に伊勢湾台風のような大きな台風を日本が経験しているからこそ、避難勧告を正確に出せるようになったという感想を記述した。しかし、その防災対策への

意識については、まだ具体性が乏しいように思われた。

そこで、地域の実情に応じた台風対策を話し合うことを通じて、防災意識を具体的にもたせることを考えた。

#### ④ 防災についての自分の考えをまとめよう

第4時には、学校・学区の歴史から、過去の災害（伊勢湾台風）について何を学び、防災についてどのように考えたのかをまとめさせた。授業の板書は、以下の通りである。

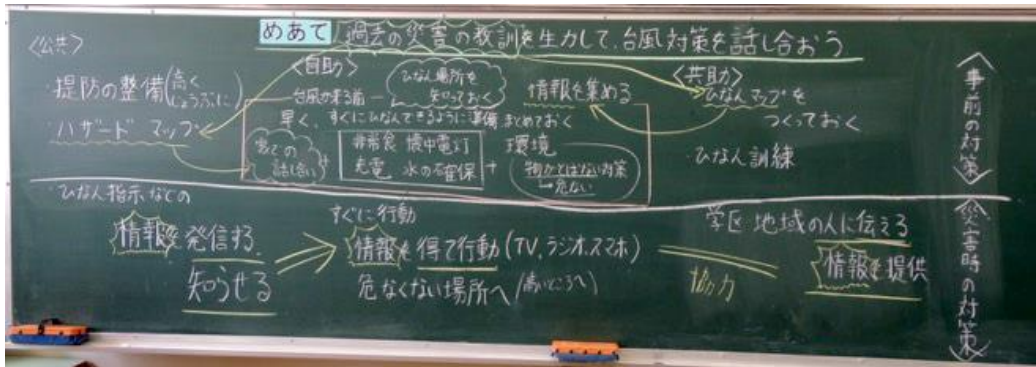


写真6 第4時における板書

第4時の授業後、A児は、以下のような感想を記述した。

伊勢湾台風はものすごい被害で、洪水はもちろん、全体がつかまり、学校は、ぐちゃぐちゃで、けが人も出て、中には、死んでしまった人もいて、すごく大変だったことがわかりました。そして、地形が変わっていないのに、大きい台風が来ても、あまり大きな被害が出ていないのは、国や地域・学区が堤防を高くしたり、避難マップを作ったりといろいろな対策をしているからだと思います。でも、それは、伊勢湾台風の歴史、大きな台風で大きな被害を経験しているから、対策、準備ができたのではないかと思います。私も、できるだけ、対策に協力をして、大きな被害が出ないようにしようと思いました。(A児)

このように、A児は、単元のまとめにおいて、伊勢湾台風の経験を生かして、国や地域・学区が防災対策をしてきているからだという歴史認識に基づく記述をしていた。そして、これまでの感想に見られなかった「私」の視点からの防災対策について述べていることから、単元を通じてA児が変容していったことがわかる。

### 3. 小学校社会科における地域教材を生かした防災教育の実践の意義

以上論じてきた「学校・学区の歴史から学ぶ防災学習」の実践を通じて、いかなる成果があったのか、また、学校・学区の地域教材を生かして行った実践に、どのような特質があったのか。以下、「公民としての資質・能力」の視点と、「カリキュラム・マネジメント」の視点の二点に絞り、その実践の意義を検証し、論じていきたい。

#### (1) 「公民としての資質・能力」の視点から

唐木 (2016, p.150) は、コンテンツ・ベースの学力観からコンピテンシー・ベースの学力観への転換を前提に、資質・能力の構造化に関する検討を深め、その中でも、社会科固有の資質・能力を表1のようにまとめている。

表1 社会科固有の資質・能力

社会科における資質・能力	①社会的事象等についての知識・技能	②社会的事象等についての思考・判断・表現	③社会的事象等に主体的に関わろうとする態度
	○社会的事象等に関する知識 ○社会的事象等について調べまとめる技能	○社会的な見方・考え方をを用いて、社会的事象等や社会に見られる課題について考察・構想する力 ○考察・構想したことを説明・議論する力	○学習対象や課題解決への主体的・意欲的な態度 ○多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される自覚や愛情など

この「社会科における資質・能力」を、「公民としての資質・能力」と同様の意味において捉えるならば、これまでに論じてきた「学校・学区の歴史から学ぶ防災学習」の実践の成果は、抽出児A児の感想記述を中心に、以下のように分析することができる。

① 社会的事象等についての知識・技能

第1時でA児は、「昔と今、あまり変わってないように見えて」と述べ、昔の地図と今の地図を比較して、地形的にあまり変化がないことへの気づきをもっている。これは、昔の地図と今の地図を、地形という観点から比較する技能をもっていたために気づくことができた知識である。また、第2時でA児は、調べ学習を通じて、伊勢湾台風の被害について、「すごく大きな被害があることがわかりました。なくなっている人まで出ていると知り、大変だった、かわいそうだったと思いました。そして、A小学校は、すごい被害を受けていることを知りました」と述べている。これは、調べ学習において「学校・学区の地図・資料」と、「校内に残る資料」を活用する技能を持ち得たからこそ獲得した知識だといえる。

② 社会的事象等についての思考・判断・表現

第4時のA児の感想における「地形が変わっていないのに、大きい台風が来ても、あまり大きな被害が出ていないのは、国や地域・学区が堤防を高くしたり、避難マップを作ったりといろいろな対策をしているからだと思います」といった記述は、国や地域・学区の人々の働きといった社会的事象に対する思考・判断・表現を含むものである。そして、「それは、伊勢湾台風の歴史、大きな台風で大きな被害を経験しているから、対策、準備ができたのではないかと思います」という社会的事象の捉え方の背景には、伊勢湾台風の被害を踏まえたからこそ、対策、準備ができたという学校・学区における防災に関する歴史認識が存在している。そのような歴史認識は、現代に生きる子どもたちにとって必要な見方・考え方となろう。

### ③ 社会的事象等に主体的に関わろうとする態度

第4時でA児は、「私も、できるだけ、対策に協力をして、大きな被害が出ないようにしようと思いました」と述べている。ここからは、社会的事象に主体的に関わろうとする態度が育成されたことが伺える。また、それまでにはなかった「私」という視点が加わったことにより、社会的事象と自分との関わりを見出した様子も示される。このように、「学校・学区の歴史から学ぶ防災学習」の実践では、現代の地域社会に生きる市民として必要な資質・能力が、単元全体を通じて育まれていたことがわかる。

## (2) 「カリキュラム・マネジメント」の視点から

『教育課程特別部会 論点整理』（中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会，2015年，pp.23-24）では、「社会に開かれた教育課程」の実現を通じて子供たちに必要な資質・能力を育成するという新しい学習指導要領等の理念を踏まえ、これからの「カリキュラム・マネジメント」については、以下の三つの側面から捉えられると述べている。

- ① 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- ② 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
- ③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

(下線部は筆者)

この「カリキュラム・マネジメント」の三つの側面の中でも、①教科横断的な視点②PDCAサイクル③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること、といった視点を社会科授業の中に位置づける必要があろう。そこで、これまでに論じてきた「学校・学区の歴史から学ぶ防災学習」の実践の授業構成における意義を、「カリキュラム・マネジメント」の三つの側面から、考察していきたい。

### ① 教科横断的な視点

元来、「防災学習」とは、教科横断的な学習である。実際の自然災害の場面では、各教科で育まれた様々な力が、地域における災害の状況に応じて、総合的に問われていくこととなる。本実践を通じて、児童は、「私も、できるだけ、対策に協力をして、大きな被害が出ないようにしようと思いました」というように、歴史的思考力だけでなく、道徳の実践力をもち行動できるようになっていった。こうした教科横断的な学力を育むことができたことが地域教材を生かした防災教育の良さだと思われる。課題は、台風という自然災害に絞って防災対策を考えたことが挙げ

られる。他の自然災害との関連も追究させていきたい。

## ② PDCAサイクル

本実践の授業構成に際し、計画（P）段階において、「学校・学区の歴史から過去の災害（伊勢湾台風）について学び、これからの防災について考えることができる子どもを育てる。」というように、単元のねらいを明確にして取り組んだ。そして、実施（D）段階では、地域や子どもの実態に応じて、4時間完了という形で、柔軟に授業構成を行うことができた。しかし、評価・改善（CA）段階については、抽出児だけではなく、児童全体の実態を踏まえ、今後もその成果と意義を検証していく必要がある。小学校社会科として、地域社会や学級の子どもたちの実態に合わせて、いかなる力を身につけさせていくことが適切であるか、どのような単元の展開を行うことが適切であったか、どのようにして子どもたちの社会認識を深めていくべきであるかなど、授業構成に関わる考察の積み重ねが必要となる。本実践の分析を通じて、その改善・修正のための一つの視点を示したと考える。

## ③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること

本実践では、第2時において、伊勢湾台風当時の学校・学区の地図・資料と、校内に残る資料から、伊勢湾台風の被害状況についての調べ学習を行わせた。児童たちは、身近な地域の教材を活用したことにより、地域の社会的事象を具体的に考えて、自分たちでできる防災対策について進んで考えることができるようになった。課題は、地域教材の選択や活用のあり方が挙げられる。被災地以外の地域における地域教材の活用のあり方について、今後も継続して検討していく必要があると考える。

## 4. おわりに

本研究のまとめとして、小学校における地域教材を生かした防災教育の授業構成と実践分析を通じて、以下のような意義が明らかになったことを論じることができる。まず、「公民としての資質・能力」の視点からは、①社会的事象等についての知識・技能、②社会的事象等についての思考・判断・表現、③社会的事象等に主体的に関わろうとする態度を育むことができたことである。また、「カリキュラム・マネジメント」の視点からは、①教科横断的な視点、②PDCAサイクル、③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせることができたことである。

さらに、本実践の場合、子どもたちが過去の地域における防災の取り組みに関する歴史認識を獲得し、現代の自然災害に対しても、具体的に考え行動できるようになったことにも、実践としての意義を認めることができる。本実践のように、小学校社会科において地域教材を活用することの良さは、子どもたちが自分たちの住む地域の実態を踏まえて、地域における課題について考

え、具体的に行動できるようになることにあるといえよう。

今後も筆者らは、様々な地域における事例に即して、小学校社会科における地域教材を生かした防災教育の授業構成と実践分析に関する検討を進めていきたい。そのためには、過去の優れた社会科授業実践の掘り起こしを行っていく必要がある。そして、それらの実践が果たした意義を整理し、地域の実態に応じた小学校社会科における防災教育のあり方について考察を深めていきたい。

※ 本論の執筆分担は以下の通り、1. 3. 白井、2. 松本、4. 白井と松本の共著

### 【注】

- (1) 大澤克美 (2018) 「社会科は大規模自然災害にどう向き合うのか」日本社会科教育学会編『社会科教育と災害・防災学習—東日本大震災に社会科はどう向き合うか』、pp.211-220
- (2) 唐木清志 (2016) 「社会科教育改革と市民的資質」唐木清志編著『「市民的資質」とは何か—社会科の過去・現在・未来を探る—』東洋館出版社、pp.148-158
- (3) 田村知子は、マネジメントサイクルの中でも、評価・改善 (CA) 段階の困難さを指摘している。田村知子 (2011) 「カリキュラムマネジメントの実践方法」田村知子編著『実践カリキュラムマネジメント』ぎょうせい、p.12
- (4) 須本良夫・田中伸編著 (2017) 『社会科教育におけるカリキュラム・マネジメント—ゴールを基盤とした実践及び教員養成のインストラクション』梓出版社
- (5) 松本卓也 (2019) 「小学校3・4年 過去から学び、世界的協力を踏まえた防災学習」『社会科教育』No.717、明治図書、2019年1月、pp.58-61に実践の一部を報告している。

### 【参考文献】

- 日本社会科教育学会 (2015) 「『災害に備える社会科』特集論文」『社会科教育研究』第127号
- 日本社会科教育学会 (2016) 「I 特集 社会科における復興教育の可能性をさぐる—新たな地域創生と社会参画《シンポジウム》《論考》」『社会科教育研究』第128号
- 日本社会科教育学会編 (2018) 『社会科教育と災害・防災学習—東日本大震災に社会科はどう向き合うか』明石書店
- 松沢正三記・撮影 (1959) 『南陽町の被害と防疫活動 伊勢湾台風』
- 名古屋市立南陽小学校 (1961) 『伊勢湾台風 一周年を迎えて』
- 名古屋市立南図書館勢湾台風資料室所蔵『伊勢湾台風災害誌 名古屋市小中学校 (港区)』製作年不明

受理日 2019年5月18日